

保育の基本がここにはある

津守 真

Hくんと弁当を食べていた。

ふと衝立の後ろを見るとYくんが私を見てにこりとした。つい相手をしらないではいられない笑顔である。

基本的なことをひと通りやる。——差し出すことと受け取ること

Hくんはそこにあつた鉛筆や折り紙を次々に自分から私に差し出した。私はひとつひとついいねいに受け取った。そのうち私が手ぢかな物を差し

出すとその子は手を出して受け取った。何度もそれを繰り返した。こうしているうちに、その子は私と一緒にいることに安心感を覚えたのだと思う。

——内と外

Hくんはそこにあつた折り紙やクレヨンやコップに入れ始めた。それが面白くて、いくつもコップが並んだ。その脇に段ボールの箱があつた。Hくんはその中に入って笑った。私が身を低くして

子どもから見えなくして、また顔を出すとキヤツキヤツと笑う。何度も繰り返してとても喜んだ。私はこういう内のものを外に出したり、外のものを内にいれたりする遊びを基本的経験と名づけてきたが、それは生命性をもっている。子どもにはそれをするのが面白くてたまらない。一緒にいる大人にもその生命性が伝わってくる。

子どもの背後の流しでひとりの実習生が筆を洗っていた。Hくんはその音に振り向き、段ボールから出て流しにいった。私は筆と絵の具を出してあげたが、それには見向きもしない。そこにあった容器に水を入れて、隣の流しにあげる。それから別の容器にあげる。そのうちに流しの外に水をあげてしまった。内のものを外に出し外のものを内に入れる遊びである。私は急いで雑巾で水を拭いた。袖口をまくってあっても少しずつシャツも濡れてくる。Hくんは自分のデニムのつなぎのポケットにも水を入れてしまう。そして最後に

自分が流しに入ってしまった。そして自分でこの遊びを終わった。

こういうのはごくあたりまえの三歳の子どもの遊びである。私と安心して一緒にいられると分かったとき、この子は人間がだれでも幼いときから学び、会得し、展開させてゆく「内と外」の遊びを始めたのである。

この子はダウンズ症である。しかし保育においては、「ダウンズ症の子の保育」などありはしない。同様に障害の分類別の保育などありはしない。

Hくんの家では、若い両親も祖父母も、この子は家の光だと言っている。

庭でKくんが母と低い台を上り下りしていた。たまたまKくんが台から下りてきたとき、私のほうに來たので、私は手を広げて迎えた。子どもは目をそらして、母のほうに引き返した。母は「あ

「あ恥ずかしい」と言って、子どもの代弁をした。そのうちに子どもは目をそらしながら少しずつ私のほうに近づいてきた。この子は私に関心をもっていることは明らかだった。私はできるだけ静かに、シャベルを子どものほうに差し出した。私の手よりも近づきやすいと思ったからである。何度も子どもは行きつ戻りつするうちに、私の手からシャベルを受け取った。そのうちに私の手のひらの上の砂に自分の手でさわることもあった。そしていつの間にか私と砂場で遊び始めた。

子どもに接するとき、よく見ていれば、こういう子には静かにそろそろと近づけばよいということとはすぐに分かる。自閉症だからこうするというのではない。

Aくんが突然私の背中におぶさってきた。私で

なくともよかったようだ。足を突っ張って背負いにくい。母は、「家で機嫌は良いが、混乱している最中です」と言って明るく答えた。

この母親は、最近は一ひとりでよく遊ぶようになっていたこの子の変化を落ち着いて受けとめている。いまは何か子どもに変化のときで、子どもには戸惑いがあることを分かっている。そのときをしっかりと付き合おうと思っている。一時は相談所で自閉症と言われて子育ての元気を失いかけていたこの母親も、いまは自閉症だからこうするのだというような定型的な考え方をしない。保育者はその時の子どもの状況を良く見て、それに応答することを知っている。そして子どもと心を通わせ合う喜びを体験している。

(愛育養護学校)